

こころと身体の在り方についての心理臨床学的理解の試み—心身症を通して
A Study on Mind and Body from the Viewpoint of Clinical Psychology:
through Psychosomatic Disease

研究代表者 築山 裕子 (D2) 教員 藤原 勝紀
研究分担者 梅村 高太郎 (D2) 笹倉 尚子 (D1) 谷垣 紀子 (M2)
林 明日香 (M2) 古川 裕之 (M2) 高橋 優佳 (M1)
中野 江梨子 (M1)

〔研究目的〕

身体はこころがあらわれるチャンネルの一つだといえ、こころで抱えきれないものが無意識的に、また病という形をとって表現されるが、それがどのようなメカニズムによって起こってくるのかは解明されていない。そこで本研究では、心理臨床学的観点からこころと身体のあり方を考えることを目的とし、その手がかりとして心身症を取り上げた。

心身症とはその発症や経過に心理的な要因が密接に関与し、器質的・機能的障害の認められる病態のことであるが、その関与の仕方は明確ではない。心身症者のありようは、心理的な要因によって発症し、それを除去することによって身体症状が治癒するといった因果関係では捉えきれず、その背後にはこころと身体の複雑な連関が考えられるのではないだろうか。このような視点から心身症におけるこころと身体への理解を深めるためには、彼ら自身の体験や主観が手がかりとなってくる。今回は、心身症の七大疾患の一つであるアトピー性皮膚炎（atopic dermatitis、以下 AD と略す）を取り上げて研究を行った。

〔研究経過〕

AD 患者への心理療法の有効性がいわれる中で、そのパーソナリティについては多くの研究がなされている。中でも攻撃性については興味深い結果が示されており、対人関係において言語的に攻撃性を表出しがたい臨床像と同時に、無意識的な次元にはその存在が推察されるとする研究結果も示されている。

そこで AD 患者の攻撃性のありようを捉えるために、P-F スタディを用いて調査を行

った。今回は通常の施行に加えて秦（1993）の質疑法を用いて内的反応を聴取し、内的反応（内言）と外的反応（外言）を比較することによって、攻撃性の表出の仕方や抱え方を考察した。

また、本研究ではより深くこころと身体のある方を考察するために、外部講師を招き、こころと身体双方に症状が現れる「解離症」をテーマにしたシンポジウムを行った。講演とディスカッションを通じて「解離症」におけるこころと身体のある方について考察を深め、調査結果ともあわせてこころと身体のある方についての考察を行った。

〔研究成果〕

調査結果から、AD 群は外言では欲求不満場面において葛藤に向き合うというより、事態を自分のコントロール下に置くことで、情緒的な揺れを見せず対人関係に踏み込まない、自己完結的な姿がうかがえた。内言においては、AD 群は対照群（C 群）よりも欲求不満を招いた人物に対して、非難する・謝る・許すといった自己主張が強く存在していることが推測された。C 群が内言では欲求不満を率直に感じて表したような不満の呟きを示すことと比較しても、AD 群は内面では不満の呟きにとどまることができず、強い自己主張という形で不満が噴出する傾向があると考えられた。以上から、AD 群の特徴として表面的にはアグレッションが弱い、言語的に表現されうる意識的な次元に、強いアグレッションが存在している可能性が示唆された。

また外言と内言の組み合わせの検討から、AD 群は、対外的に自己主張できなかった不満が内面で噴出するか、あるいは内面に存在する不満を対外的に表出することをためらっている様子がみられた。対外的に自己主張した場面では、C 群は内面では不満の呟きにとどまるのに比べ、AD 群は強い自己主張が収まらない様子がみられた。これらから一度表出すると止めどなく出てくるアグレッションの激しさ、根深さがあると考えられた。この激しい攻撃性が表出されるのを阻止するために、アグレッションは感じられつつも、ある程度意識的に抑制されていると思われた。

シンポジウムからは、解離症者には他者や周囲の状況・雰囲気に対する敏感さがあり、解離症は外的状況に対して過剰に反応する身体を乖離している状態だとみることができると考えられた。また、解離症は自己の *existentia*（実存）の問いを繰り返しているが、この問いは達成されることのない永遠のテーマとして解離症に限らず存在している。解離症の検討から自己の *existentia* への接近の可能性を自己の身体に見出だすことができ、心理臨床における身体的重要性が改めて認識された。

以上を総合してこころと身体のある方を考えると、ある種の敏感さゆえにこころでは抱えきれないことを、身体によって表現したり、身体を乖離している様子がうかがえた。この未分化さと乖離が同時に存在することが症状につながると考えられた。

共同研究者：友尻奈緒美（M2）、小西佳世（M1）、永山智之（M1）